



学園花の村機関紙第101号

2018年6月1日(金)

編集兼発行人 伊藤公博

042-636-8290

Fax 042-636-8291

〒192-0914

八王子市片倉町

937-78

100歳時代がやってきた

農業で身に着けよう

野菜中心の食習慣
持続する運動習慣

学園はなの村代表

池 守 幸 一

びつくりですが、2人に1人は100歳まで生きちゃう時代がすぐそこまで来ているらしいのです。未来を見通すのは難しいですが、人口と寿命だけはかなり確実に予測できるといいます。

かつては「めでたい」とされた長寿も、現在ではむしろ「長寿リスク」が深刻です。100歳まで生きるのに十分な蓄財をしている人はほとんどいないだろうし、高齢につきものの病気や認知症の可能性も高い。子どもをアテにできないし、年金や健康保険も100歳時代を想定して設計していないだろうから、とんでもなく深刻な時代がやってくると考えなきやいけ

ない。ではどうするかですが、もうこれは100歳を健康のうちに迎えるに尽きる、に決まっている。

病気は生活習慣が呼び込むので、キッチンとした生活習慣を確立する。食習慣としては野菜です。野菜をしっかりと食べること。運動習慣はズーッと働き続けることでしょうか。この2つをいっぺんに実現できるのが農業です。家庭菜園の農でもいい。気づいた人から始めましょう。これを誘導する社会的な仕組みも、やがて整っていくと思われます。100歳時代は農業と田舎が切り札です。農業というと産業としての農業が頭に浮かびますが、産業でない農業、生活としての農業が100歳時代には大切になってくる。

思えば日本の社会は「稼いでなんぼ」の、産業社会の論理が貫徹する国です。経済成長につながることはすべて善とする国ですが、その経済成長ばかりを追い求めるのは、もうこの辺でやめにしたら、の機運も少しずつ広がっているように思います。100歳時代の農業の経済外的活用も、この広がり的一端を確実に担うこと

になるでしょう。

そう考えるとわが花の村、この100歳時代を生きる術を先取りしていたのかもしれないと気が付きました。我田引水、牽強付会の感はあるものの、花の村の20年、捨てたものではないぞ。

南医療生協のおたがいさま運動見学

学園はなの村事務局長 藤 本 将

5月19日全報連総会の翌日、名古屋市にある南医療生協の病院を見学しました。ご案内いただいたのは非常勤の女性常務理事の崎直美さんでした。

組合員数85、905人出資総額約31億円、職員数978人、患者数入院333人、外来1,378人、事業収入111億円の大きな病院です。建物はおよそ病院とは思えない窓の多い斬新な設計で開放感のある作りでした。地域は愛知県とし、12ブロックに89地域の自治された支部がある。

RYUKUあい たすけあい

地域だんらん まちづくりを

スローガンにおたがいさま運動を広げている。全体的な印象としては個人個人が尊重され、且つ力を合わせるにより大きな力を発揮できるという協同組合の原点があるような気がしました。

新芽と花の美しいクスノキ(楠)

この界限にはクスノキが多くよく里山で見かけるし、わが家の裏にもあり、この地区の街路樹にもなっている。水垂八幡神社や天神社にもクスノキがあり、大木で風格あり神秘的靈妙な木だ。この「奇(くす)しき木」がクスノキの語源といわれているが、特異な芳香を放つので「臭(くさ)し」木から、虫よけに使われる「ク



ス玉」から、また「葉(樟脳)の木」から名付けられたとも云う。

この木は兵庫、熊本、佐賀などの県では県木に指定されているし、静岡市、磐田市、富士市、名古屋市、豊橋市など全国で多く「市の木」として親しまれている。

大木のクスノキには似付かわしくない程の小さな花が咲き実が付く。5~6月には淡い黄緑の可憐な花が沢山になると新芽とともに陽光に照らされて、ふんわりと萌黄色の布のように美しい。10月末頃は濃紫色の果実になるが、あまり殆んど眼立たず、鳥の好物となっている。(左写真は袋井ゴルフ場前のクスノキ、5/14)

小 関 栄



(上はクスノキの花、下はクスノキの実)



クスノキに 花と新芽が ふんわりと 淡水

大日本報徳社社長榛村純一さん急逝

学園はなの村事務局長 藤本 将

平成30年3月7日榛村純一さんが亡くなられました。

当日は「倉馬の里」の早咲きの「掛川桜」が一齐に開花しました。「今年は早いな」と思いつつすこしはずんだ気持ちでございました。しかしそこに小関栄さんから「榛村さんが亡くなられた」との知らせが入りました。びっくりいたしました。

「学園花の村」は今年で設立20年を迎えますが、榛村さんには設立当時からお世話になりました。当時はまだ現職の市長でありながらご多忙な中「倉馬の里」の開村式にご出席をいただいたり、花の村発行の「みんなであらう小さい農業」にご寄稿を頂戴したりと、お心をかけていただきました。

3月7日の掛川桜の一齐開花は私にとりましては単なる桜の開花ではないような気がしてなりません。その時の私には「倉馬の里」という自然が榛村さんに感謝して開花したとしか思えませんでした。

もともと私は奇蹟とかいうものには縁が遠い存在でした。しかし今回の桜の一齐開花は「倉馬の里」という自然が榛村さんに感謝したいとの気持ちの表れとしか思えません。大変僭越ですが「倉馬の里」に代わり私が筆を取らせていただきました。「榛村さん、どうもありがとうございました。 合掌」

光陽の里通信

● 20周年記念収穫祭

はなの村と共催

学園はなの村に入会して早いもので20年が経ちました。今年は20周年ということですので、光陽の里の秋の収穫祭と20周年記念祭を並行して行うことがはなの村の例会で決まりました。

ここ光陽の里の楽農会を立ち上げて10年余が経ちました。立ち上げに際して今は辞めてしまわれた第4ふれあい農園の立木さんに会の規則や申し込み用紙などいろいろお世話になりました。

● 楽農会の解散計画

残念なことに、2020年12月末をもって楽農会を解散することになりました。毎月第2土曜日の世話役会の合議で、ここ光陽の里を運営してきた今の世話役の老齢化と、空き農地の拡大がその原因です。毎年3,000円の会費を耕作者から頂いて空き農地と水道管理料を楽農会負担としてきましたが、10年来の利用設備や立木の撤去に金がかかり、楽農会の運営

が困難になりました。

幸い本年より農地の中間管理機構が国の施策として動き出しました。当楽農会の耕作者の中にその有資格者がおられます。「しあわせ野菜畑」の大角さんが有機農業のJAS認定を有しておられます。できればここ掛川の地に日本一広い有機農地を継続してゆきたいと思います。全国にまたとない広い農地を維持し。創設期の指導者である宮城正雄さん(故人)と津野幸人先生のご意思をつなげてゆきたいのです。とは言え、この光陽の里は地主さんあつてのものです。地主さんあつてのものであるという事実は変えられません。5月27日(日)、午後7時より旧公民館にて地主さんの現状説明をしてからと思っています。

5, 6月中に第2回の総会を開いて、耕作者の仲間に説明したいと思っています。

光陽の里 楽農会代表

野田 芳宏

いきいき 活き粋ばあばの学舎だより(5)

いきいき 活き粋ばあばの学舎 柴 桂子



家中のすべての窓が一面の青葉で覆われ、庭に出ると青葉の匂いに満ちている。この季節は庭や畑の彩の変化が速い。畑のネギ坊主のてんぷらはお菓子よりおいしかった。スナックエンドウやソラマメは飲み仲間のつまみに喜ばれた。露の佃煮や三つ葉や春菊主役の白和えは来客に大好評だった。サニールタスは柔らかく何を包んで食べてもおいしい。もうすぐラッキョや梅漬けが始まる。こんな小さな庭にも味噌汁の具には事欠かない。無農薬無肥料の作物を採って10分で料理できる幸せに毎日手を合わせている。

あやめ、撫子、キンセンカ、マーガレット、フロックス、ミニヒマワリ、矢車草、テッセン、シヤクヤク、つつじ、紫陽花、ウツギが次々と庭を飾る。もうすぐタチアオイや百合、アマリリスが開花す

ると庭は一層華やかになる。小さな果樹園も賑やかになった。ブルーベリーや柑橘類、カリンは白やピンクの花を終え、小さな実を付けている。今年は紅レモン、アーモンド、八朔、オリーブを加え、道側には近所の子供たちの為にグミやベリーを植えた。

「活き粋庵」の看板を掲げた「活き粋ばあばの学舎」の来客も増えた。4月21日から2泊3日のスケジュールで京都で行っているゼミの皆さんが来てくださり、昼は掛川城周辺や福田港の観光やイチゴ狩り、更に花の村の光陽の里、倉馬の里、時の寿の森の見学、夜は地域の方々と交えてのゼミの後は飲み会と、楽しい時を過ごした。

5月6日は地域の排水路清掃の後、「活き粋庵」に近所の子供を含めた20人の方たちが集まり、食事会飲み会を行って親睦を高めた。

5月は「活き粋庵」の第一回の文化展として水島さんの浮世絵、観音図展を開催した。兼ねて準備中であつた「小っちゃなお助け隊」の福祉活動も開始し、私は活動第一号として眼科の送迎を依頼し大いに助かっている。

若者が住みたくなる場所づくり

里山倶楽部会長

溝口博之

農山村は若い時代の人間形成にとってまことにいい環境です。自然に親しみ、先輩後輩との交流、

変な誘惑も少ない中での勉強、周りの大人たちとの触れ合い・正しい心を持った青年に成長します。でも、親や地域の人たちに世話になって大学へ行って、都会に行ったらまま所帯を持って核家族、生まれ育った故郷は少子化で消滅。

農山村は都会人を生み出すだけの場所になってしまいました。地方都市も同じようなことが言えます。

これは、木材などの天然資源が農山村から下流の都市に流れていたのが、石油などの輸入資源が入ることによって下流から上流に経済が流れ始めて、農山村まで届きにくくなったからでしょう。オカネがなければ生活できないとみんなが思い始め、より多くのオカネを求めて人材も下流に流れて行ってしまった。田舎暮らししか知ら

ない私だから都市生活のことは想像することしかできないが、コンクリートの中でオカネさえあればなんとでもなるし、無ければどうにもならない生活にあこがれる時代は過ぎたと思うのです。

収入は少なくとも田舎暮らしがいい、自然を守り育て、農山村や地方都市の文化を守り育てていきたい、という考え、価値観を持った若い衆が増え、資源が下流に流れるようにならなければ、大都市に住む人たちの未来も明るいものにはならないでしょう。

今、地方に住む大人たちは、若い衆が定住できる場所にする経済的な方策を考え、多様な価値観を持った人材になるために大学を目指すよう指導することが必要でしょう。里山倶楽部の構成メンバーは企業戦士でニッポン経済を担った強者ぞろいです。幸い掛川という地方都市に居を構え、子供たちが故郷を作ってくれた人たちです。倉馬の里を中心に若い衆が住みたくなる地域づくりを目指して楽し

みながら活動しています。馬鹿を言いながらも心はまつずぐな人達ですから・すばらしい地方都市(痴呆都市ではないぞ)になっていくと思います。

【倉馬の里の夏】ご紹介

布マルチ稲作の取り組み

昨年度は日常管理と代掻きの失敗から田んぼに高低差が生じ、布マルチを完全に浮かせることができず、ヒエの大量発生を招き、収穫はほぼ皆無でした。その反省に立ち、今年は代掻きを丁寧に行い、田んぼが均平になるよう心がけました。

今年は体調不調で松井道夫さんが断念。実施は藤本のみ。面積は7畝5歩。今年はつきつきりで管理し所期の成果を期待したいと思っています。実績を出してから地元のプロの農家に働きかけたいと考えているところです。

ピザがまでにぎ合う

このピザがまはバーベキューコーナーの一角にあります。昨年里山

倶楽部が自己資金と自らのノウハウを活用し作り上げました。当然のことながら耐火レンガを使用しています。ピザの生地は女性軍が準備します。このところ利用がひっきりなしです。「倉馬の里」の活性化に結構なことだと思います。これからの課題としてトイレの改造があります。

フジバカマの栽培

「倉馬の里」には秋の七草の一つであるフジバカマが自生しています。この度5m四方のフジバカマコーナーを作りその一角にフジバカマの苗を植えました。そのフジバカマにはアサギマダラという東南アジアから、わたりをする蝶が群れます。

アサギマダラが乱舞し、皆さんの目を楽しめてくれることを願っております。

(秋の七草)

ハギ、オバナ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ

倉馬の里代表 藤本 将